

# 第一回大東亜文学者大会の修辞学 ——大東亜共栄圏言説の亀裂

松本 和也

## 1. 大東亜文学者大会へのアプローチ

アジア・太平洋戦争期の文学場を考える際に、各種文学団体の動向は重要な要素の1つである。日本文学報国会<sup>1</sup>は、日中戦争開戦後に組織された文学者によるペン部隊を前身とし、情報局の指導のもと、1942年5月に日本文芸中央会を中心として発足した。本稿で検討対象とする大東亜文学者大会は、その日本文学報国会による「一番大きな仕事」だとされる。まずは、その概要・評価を確認しておく。

大東亜文学者大会は、一九四二年一月第一回の会議が催され、それ以後四三年八月の「大東亜文学者決戦会議」、一九四四年一月の「南京大会」と、前後三回開かれた。

朝日新聞によると、第一回参加者は、日本側代表五七名（台湾・朝鮮の九名を含む）、大会参与七四名、満・蒙・華代表二一名。第二回は、日本代表九九名（台湾・朝鮮の九名を含む）。別の報道記事によれば一〇一名、満・蒙・華代表二六名。第三回は日本代表一四名（朝鮮の一名を含む）、満・蒙・華の代表は五四名——ということである。大東亜文学者の大会と銘打ちながら、実際は日本の制圧下にあった植民地・従属国・占領地区からの参加で、日本のお手盛り行事にすぎなかった<sup>3</sup>。本稿で検討対象とする第一回の会議内容についても、先行研究に紹介があるので次に引く。

本会議は四日、五日の両日にわたって、大東亜会館で開かれた。会議は円卓形式で、戸川貞雄が司会に当り、議長菊池寛、副議長河上徹太郎で議事に入った。第一の議題は大東亜精神の樹立（発言者——武者小路実篤、柳雨生、斎藤瀏、錢稻孫、香山光郎、バイコフ、竜瑛宗、亀井勝一郎）。第二の議題は大東亜精神の強化普及（発言者——長与善郎、爵青、周化人、藤田徳太郎、恭怖札布、横光利一、兪鎮午、呉瑛、吉屋信子、尤炳圻、吉植庄亮）。続いて会議第二日は、議題として、文学を通じての思想文化の融合方法が論じられた。富安風生は、正しい俳句を普及させることによって、静かに強く生きる道を大東亜文学の土壌にしたいと説き、華中代表龔持平は「大東亜文芸協会」設置を、細田民樹は「東洋精神の共同研究」を、華北代表張我軍は「文学者、学術の相互交流」を、潘序祖（予且）は「大東亜研究院」の設立推進を、加藤武雄は「大東亜における少国民教化の方策」を、尾崎喜八、丁雨林、木村毅は「大東亜文学大賞」設置を、川路柳虹は「大東亜詩人共同詞華集」刊行を、舟橋聖一は「日満華文科大学での古典講座の増強」を、高田保は「支那劇の保存」を、山田清三郎、周毓英は「大会の毎年開催」をそれぞれ提案した。午後の議題は、文学を通じて大東亜戦完遂についての方策。発言者の提案なり意見を要約すると、まず片岡鉄兵は「新民運動への協力」、満洲、朝鮮、台湾代表である小松、芳村香道、張文環から「日、満、華作家の相互派遣」が提起され、許錫慶が「南方圏文学者からのメッセージに対する返電」を提案、それに続いて朝鮮代表辛島驍が、重慶にいる中国作家に対して「一日も早く大東亜の真精神に目覚める」よう呼びかける必要性を説き、吉川英治が米国の作家と民衆に、柳雨生が南方華僑に、一大会委員が枢軸陣営に、それぞれラジオを通じて訴えることを提議した。さらに中河与一は今次の戦いを「神とユダヤの戦いだ」とし思想戦の意義を強調すれば、村岡花子は婦人の立場から、大東亜精神を子供のうちに築きあげ

1 櫻本富雄『日本文学報国会 大東亜戦争下の文学者たち』（青木書店、1995）他参照。

2 小谷野敦『久米正雄伝——微笑の人』（中央公論新社、2011）、478頁。

3 尾崎秀樹「大東亜文学者大会について」（同『近代文学の傷痕』岩波書店、1991）、7～8頁。

るための言葉の問題をとりあげ、豊島与志雄は英米的語感から東洋的語感への転換を文学的実践において力説し、高田保、長与善郎、一戸務、林房雄らの補足説明、高橋健二（大政翼賛会文化部長）、中村武羅夫、川面隆三（情報局第五部長）の総括めいた発言をへて、戸川貞雄他六名の起草になる「大会宣言」の朗読、議長の開会の挨拶に続いて万歳三唱で東京会議をとじた<sup>4</sup>。

この行事が帝国日本による「お手盛り」であることは免れがたいが、そのことと研究対象としての意義は別に考えるべきである。「被植民者たち」の言動に注目する申知瑛に、次の論及がある。

被植民者たちはあたかも平等な立場で大会に参加していたかのように見えるが、実際は「大東亜（日本）」を主語に、「大東亜共栄圏の文学／決戦文学」を目的語に、「決議する」を述語にした文を日本語で発話しつづけなければならなかった。あるいは、「他者」の位置から「主体」の位置へと移るためには、このような発言をめぐって被植民者たちが競争するしかなかった。また彼らは帝国日本の視線の下で、誰がより正確かつ情熱的に、その帝国の文法を演じることができているかを競い合った。大東亜文学者大会は、この帝国の文法における主語を勝ち取るための競合の場であった<sup>5</sup>。

もとより、参加・発言の自由は検閲も含めて帝国日本に管理されており、それゆえ自発的な発話を「被植民者たち」は強いられたのだが、同時に次のような局面も申は指摘する。

「帝国日本」の秩序を積極的に真似ようとする植民者たちの身振りを道徳的に判断することは別に、このような「主語を欲望する他者の身振り」が「主語」そのものを変形させたことの持つ意味は注視に値するだろう。「同化」政策が積極的に進んでおり、それが被植民者たちに内面化される状況であっても、帝国の単一の主語や統一された「帝国」の秩序というものが不可能であることを露わにするからである<sup>6</sup>。

本稿では、参加者の主体性や歴史的条件下での表現といった先行研究の論点<sup>7</sup>をふまえつつも、こうした亀裂に照準をあわせる。大東亜文学者大会をめぐる言説が空疎な揚言だったとしても、それらはなお重要な検討対象である。本稿のねらいは、第一回大東亜文学者大会をめぐる言表－修辞を分析し、イデオロギーに覆われた大文字の歴史から、文学者が関わった小文字の歴史を照らしだすことにある。

## 2. 大東亜共栄圏言説の理念／亀裂

本節では、第一回大東亜文学者大会の検討に先立ち、分析枠組みの準備もかねて、関連する大会前の議論を素描しておく。1941年12月8日の対米英開戦以降、文学場も含めた言説が大きな転回を遂げていったが、大東亜文学者大会は時局に対する、文学者からの強いられた応答でもあった<sup>8</sup>。

ここで、大東亜共栄圏（構想）へと至る帝国日本の領土拡張に関して、「太平洋戦争直前には、新たに拡大した帝国の建設は、ほとんどいづれにおいても「日本の帝国」ではなく、ある種の「アジアの共同体」という言葉によって想像された」と指摘するP・ドウスは、それゆえに「東亜という国家よりも地域的な概念を指すことばを使うことによって、日本人は朝鮮人、中国人、蒙古人のみならずビルマ人、フィリピン人、ジャワ人とも深い親近性を想像することが可能となった<sup>9</sup>」のだと論じている。

以下、本稿では、英米／（大）東亜という分節－用語をベースとしながら、広義の“西／東”まで含め、個々の言表－修辞に即して地域の表象に注目していく。茅野蕭々「菊花薫る佳節に迎ふ 大東亜文学者大会の意義」（『日本学藝新聞』1942.11.1）には、「米英蘭の勢力を大東亜から駆逐するといふこと

4 注3に同じ、23～24頁。

5 申知瑛「他者は、他者と出会うのか——「大東亜文学者大会」の植民地人たち、その発話・変形・残余——」（『思想』2013.3）、123頁。

6 注5に同じ、134頁。

7 主要先行研究および同時代記事のリストは、尾崎前掲書・注3に掲載されている。

8 この時期の文学場の動向について、拙著『昭和一〇年代の文学場を考える 新人・太宰治・戦争文学』（立教大学出版会、2015）、拙論「マレー・シンガポール攻略作戦をめぐる報道文——昭和17年文学場一面」（『文教大学国際学部紀要』2018.1）参照。

9 ビーター・ドウス／浜口裕子訳「想像の帝国——東アジアにおける日本——」（同・小林英夫編『帝国という幻想——「大東亜共栄圏」の思想と現実』青木書店、1998）、23頁。

は、単にその武力や経済力を排除するのみではなく、同時にまたその根本に横はる彼等の文化理念を征圧して、これに代る新文化の理念を大東亜民衆の魂に覚醒せしめることでなければならない(1面)とあり、米英蘭に対置して大東亜という地域、大東亜民衆という構成員が想定されている。同様の設定は、大東亜文学者大会を「日、満、華、蒙盟邦の文学者が、亜細亜の天地、我らの思想、われらの生活、われらの文化の領域に、長く侵略をほしいまゝにしきたつた米英等の思想を、文化を、根底より撃撲し、東洋文化の真髓に返つて、真の世界平和と人類の文化向上のために、血を綴つて協力挺身せんことを契る集ひ」だと位置づける無署名「社説 大東亜文学者大会開く」(同前)にもみてとれる。同文は、次のように日本の役割にも論及する。

幸ひにして今の新しい世紀の黎明は明けようとしてゐる。この期に際して開かれる本大会における東亜の代表的文学者の言動にたいしては、ひとり日満華蒙のみならず南方共栄圏は固より、全世界が耳目をそばだて、ゐるといつても言を過ぎではあるまい。殊に国体の尊厳を奉体し、歴史の精華を担うて立つ東亜の盟主たる日本の代表議員の責任は重い。(1面)

ここでは、国名が示されつつも、歴史・地理・文化を通じた「紐帯」が強調された後に、東亜-東洋に西欧が対置されている。しかも、引用結部では再び「東亜の盟主」と位置づけられた日本への言及がみられ、地域/国を都合よく出し入れするかのような言説の二重基準ダブル・スタンダードも作動している。

もっとも、再びP・ドウスが指摘するように、「[アジア]であれ「東洋」であれ「東」であれ、その概念はヨーロッパに起源がある」のであり、「日本や中国や朝鮮やインドの場所を示す「東」とは、ヨーロッパに住んでいればこそ意味をなす」<sup>10</sup>。してみれば、大東亜共栄圏に集約される(大)東亜-東洋といった用語自体が、対峙すべきヨーロッパ(西洋近代)を基点としたものであり、東洋から西洋を対置する構図もまた、西洋近代が東洋にもたらした難問の産物-帰結でもあるはずなのだ。

それでも、大東亜共栄圏という理念を掲げて米英と大東亜戦争<sup>11</sup>を展開している以上、具体的な局面での言表-修辞は多様に現象するとしても、“西”に対峙する“東”という言説の構図は、この時期頻りに反復されていく。汪兆銘の側近・林柏生による「東亜文芸復興」(『文藝』1942.7)を、次に引く。

大東亜戦争の軍事的勝利は、既に英米の政治経済上に於ける侵略勢力を消滅したが、我等は更にこの戦争の展開と完成に随伴して、東亜文芸復興運動を推進しなければならない。その消極的な方面では英米帝国主義が思想上文化上に散布せる毒素を徹底的に肅清すると共に、積極的方面では、東亜文化固有の精神を恢復し、近代科学文明を運用して、東亜新文化を創造するものでなければならない。[略]同時にまた科学的方法に本づいて、東方の道義精神を恢復し、東方の王道思想を恢復し、東方文化の歴史上に於ける光輝を恢復しなければならない。(14頁)

表面的には、大東亜戦争の軍事的勝利を背景に、英米的なるものを打倒し、同時に東亜文芸復興を目指すという主旨が読みとれる。その上で本稿では、英米という国家(およびそれに基づく思想・文化・主義)に対峙する「我等」の内実が、国家(名)ではなく東亜-東方という地域で示された言表-修辞に注目したい。しかも、(大)東亜が“西”を基準としているというばかりでなく、東亜-東方を「恢復」させるための手段としては、おそらくは西洋と切り離せない「近代科学文明」が選ばれている。また、タイトルには「東亜文芸復興」と掲げられているが、同時に「東亜新文化」の「創造」も目指されており、伝統的な東亜文化を復興するのか、新たに創りあげるのか、その方向性も統一されていない。つまり、主旨・内容とは別に、言表-修辞レベルでは、曖昧な振幅・矛盾を孕んだ一文となっている。

そうであればこそ、「中支文化人への希望」(『文藝』1942.10)において片岡鐵兵は、「古典を振返るとは、自己の中の古典の再発見でもある」、「日本人と支那人との共同の驚きの中に、共同の自己発見の中に、真の親善と提携の根柢が生れるのだ」として、東亜地域における両国人の共通点を、西洋介入以前の「東亜の古典」に求め、「新しい東亜」の「建設」(58頁)を目指そうとしていくのだ。

しかも、(大)東亜が英米との戦争に際して掲げる“東”という地域(の連携)の内部には、もう1つの難問が内在している。片岡論と同時掲載された、豊島與志雄・片岡鐵兵・谷川徹三・増田渉「座談

10 注9に同じ、23頁。

11 本稿では大東亜文学者大会との連関から、歴史的用語として「大東亜戦争」という呼称を用いる。

会「東亜文芸復興」(同前)において、「東洋文化とか、東亜文化とかいふことを表面に押し出すといふことは実は首を捻る」のだという谷川徹三は、「若し東亜文化といふものを表面に押し出すとすれば、尠くとも過去においては、日本文化の場所といふものは非常に小さくなつて了ふ」、「東亜文化といふものはやはり支那文化を中心としたもの」(137頁)なのだ<sup>アボリア</sup>と断じる。その上で谷川は、日本を「東洋の文化の正当な遺産相続者」、「東西文化の融合を達成しうるやうな位置に今立つてゐる」と評価した上で、「日本の場合、新しい東洋文化といふものをどこまでも日本が中心になつて創り出すべきで、それは一つの新しい、つまり第三文化でなくちやならない」(138頁)と主張していた。第一回大東亜文学者大会をめぐる言説においては、直接こうした難問を掘りさげた言表はほとんどみられないが、逆にこうした亀裂を露呈させないためか、米英に(大)東亜を対置する言説が強迫的に反復されていく。

ここで、一見支配的な言説と類似していながら、本質的なレベルで谷川の発言に(一部)共振しているとみられる、一戸務「大東亜文学者大会の意義」(『日本学藝新聞』1942.11.1)を次に引く。

新聞紙上などで、この大会を目して東亜文芸復興であるといつたやうな題目をつけてゐるが、私からはせれば、決してこれは東亜文芸の復興ではなく、建設なのである。復興とは、曾つてあつたものが再生するのであらうが、東亜総合体における文芸は、実に今日以後において生れるのである。日本文化、支那文化、印度文化、その他東亜各地の文化は、それぞれの地域でそれぞれに独自の発達をしてゐる。

日本、支那、印度を列挙しながら、それらを国といわずに地域(「各地」と捉え、「対西洋の文化」に配置することで、「今日以後」における「東亜文化」の「建設」-「新文化」(1面)を謳っている。他にも、(大)東亜を一体化させていこうとする言表は多い。「大東亜文学者大会の第一の目的は、大東亜共栄圏の文化建設といふ重大な責任を持つた我々文学者が、共同の責務と覚悟と努力を宣明し、そのための親和力を固め、交流を高めるための出発点をなすにある」とする「大東亜文学者大会の力点」(同前)の春山行夫は、「特にここで、『我々』といふ意味が、この大会に参加するすべての代表者の共通の代名詞とならねばならない」と「強調」(4面)している。ただし、(大)東亜地域の一人称複数代名詞「『我々』」は日本語である。従つて、金子光晴が「大東亜文学者大会に就て」(同前)で、「今日、我々は糧を与へねばならない幼弱な国々を周囲にもつことになつた」と言明する通り、ここには序列が孕まれており、金子は「殆んど最初の経験としての日本の文学者は、与へるべき糧について慎重に考へて欲しい」、「衝にあたる日本の文学者は、先づ共栄圏内の他民族を出来うる限り知つてほしい」(4面)という希望を言明してもいた。

### 3. 本会議の修辞分析

#### 3-1: 大東亜文学者大会の意義、文学者の役割

第一回大東亜文学者大会は新聞等で報道された他、『日本学藝新聞』が特集「大東亜文学者大会」(1942.11.15)を組み、『文藝』も「全会議録」(1942.12)を掲載した。本節では『文藝』の記事に即し、適宜関連文献も参照しながら、以下に第一回大東亜文学者大会での言表-修辞を分析していく(以下、本稿で発言者のみを示した引用は、全て同誌による)。

まずは、11月3日の発会式での発言をいくつかみておこう。

「東洋の民族もあらゆる方面において、米英の桎梏から解放され、新に幾多の催しが行はれてゐる」(3頁)と下村宏は、「東洋の文学界を代表するお互が親しく相会し、相互の理解を進めて行くことは、独りこの戦争の完遂のみならず、平和回復の後大東亜共栄圏の新秩序建設において、極めて重要なこと」(4頁)だと述べている。ここで、東洋/米英を対置する下村は、東洋の文学者の相互理解によって、大東亜共栄圏を「新秩序」と称して建設すべきものだと位置づけている。

情報局次長・奥村喜和男は、大東亜共栄圏に関わる文学者の意義を次のように述べている。

思ふに大東亜の中核たる日本、満洲国、中華民国を始め、東亜の代表的文学者が一堂に相会し、相互に胸襟を披き、数日にわたつて大東亜戦争完遂と大東亜共栄圏の完成について文学者として挺身

協力の方途を議せられることはまことに空前の催しで、ひとり大東亜文学史上まことに意義深きことたるのみでなく、大東亜の建設、アジアの復興史上に不朽の光彩を添ふるものと確信いたします。(4頁)

ここでは、大東亜については「建設」、アジアについては「復興」と、同じ地域を対象としながらも、目指すべき時間軸の方向性が分裂している。しかも、奥村は「われらのアジアを踏み躪つた侵略者を排除するための戦争はこれぞ正しく戦はざるべからざる正義の戦争であり、こゝに破壊されるのは米英の侵略主義文化であつて、アジア本然の文化は寧ろこの戦ひを通して、正に創造されんとしつゝある」(5頁)として、アジア／米英を対置しながら、アジア文化についてはその「本然」の「創造」を謳っており、なお両義的である。ちなみに奥村は、「米英的文化」については「主知主義、合理主義、唯物主義」、「高利貸的非勤労文化、搾取的商人文化」、「分化主義」と、「アジアの文化」については「全人格的直観主義」、「崇高なる土と勤労の文化」、「綜合統一の文化」(5頁)と特徴づけており、二項対立を重ねることで「米英的文化」に対する「アジア文化」の優位を積極的に言表していく。

また、大東亜文学者大会では文学者の位置づけも示されていく。陸軍報道部長・谷荻那華雄は、「大東亜建設途上における文学並に文学者の重要性」を「思想線の中核分子」、「文化兵団の尖兵」(6頁)である点に求め、さらに「特にコミンテルンの共産主義、英国の帝国主義、米国の自由主義といふやうな、わが大東亜の思想、大東亜の文化に害毒となるべきものは、この機会に全部根本から一掃すべく努力しなければならない」(7頁)と、大東亜に英米、さらにはソ連を対置し、「害毒」とまで称していく。なお、海軍報道部課長・平出英夫も文学者を「思想戦の第一線将兵」(8頁)と位置づけている。

### 3-2:(大) 東亜に対置される米英

大東亜文学者大会における支配的な言説の1つは、大東亜戦争の戦局に即して、大東亜共栄圏という地域-表象を、(大) 東亜／米英の序列を孕んだ分節によって遂行的に意味づけていくものである。

中華民国代表として銭稲孫(日本語)と周化人(華語)は、「われ／＼東亜民族は東亜独特の文化を有し、崇高博大なる精神を有し、且つ深甚高邁なる政治思想を有する」と、「東亜民族」という枠組みによって「われ／＼」という一人称複数代名詞を用いながら、「近來西洋文化の侵入を受け、東亜の文化はかかる侵害の中に不安の状態を続けて」きたという来歴をふまえ、次のように語っている。

幸に日本の先覚があり、明治維新以來西洋の科学文化を吸収して、東亜文化の復興の基礎を作り、しかも日本民族固有の皇道文化の根柢を堅められたのであります。そしてその西洋文化を吸収するに当りましては、たゞそれを更生の道具として利用し、西洋の所謂帝国主義、功利主義を全く捨て、なほ一歩進めて東洋道義精神を發揚して、こんにち東亜解放の責任を有られたのであります。

東亜／西洋を対置しながら、「西洋文化」をとり入れた日本をその取捨選択ゆえに是とする銭=周は、つづけて大東亜戦争を「東方の王道思想と西方の霸道思想の決戦」と捉え、「われ／＼東亜民族は、今こそ東洋文化を一層發揚するのみならず、東亜新文化を創造し、以て崩壊を辿りつゝある西洋文化に代ることに努力せねばなりません」(10頁)と述べ、東亜文化の發展的延長線上に「東亜新文化」の「創造」を目指すばかりか、「西洋文化」が占めていた地位の奪取までが目論まれている。こうした志向性が「王道」よりも「霸道」に近いことは自明で、ここにも亀裂が刻まれている。

華中の柳雨生は、「何故われ／＼が米英侵略国家と違ふか」という問いに対し「道徳を強調し、信義を考究することがわが東亜の精神」だとして、やはり米英(国家)に東亜(地域)を対置させ、「われ／＼東亜の文学者達は彼等の思想を打倒し、指導精神確立の責任を尽し、全東亜の文学者をして東亜新精神の樹立に一致協力せしめなければならない」(17~18頁)と述べている。ここでは、一人称複数代名詞を介して一体化された東亜の構成員による「東亜新精神の樹立」が目指されている。

これら大東亜戦争-大東亜共栄圏に即応した議論に対して、「西洋精神との対決を迫られ、それが齎した危機、これが一口に云つて近代東洋の絶えず悩んで居た問題」(24頁)だと“東／西”の近代を問題化するのは亀井勝一郎である。「近代東洋において二つの重大な悲劇があつた」という亀井は、「ヨーロッパ文明に対する敗北屈従」=「ヨーロッパ精神の植民地であるやうな状態を残念ながら永い間東洋

は保持してゐたこと」と、「同じ東洋の民族でありながら日本と中華民国とが互ひに血を流し合つて戦はざるを得なかつた」ことをあげ、次のように議論を展開していく。

それではわれ／＼東洋人の救ひは一体どこにあるかと申しますと、申すまでもなくこの悲劇自体の中にあるのであります。つまり日支両国が血を流して戦つたといふことは確かに東洋の一大悲劇であり、苦痛でありましたが、今日私たちがこゝに集まつて、全東洋民族が一致して本当の意味で西洋精神に対決し、将来の世界に何物かを齎さんとするやうな、さういふ覚悟はこの悲劇の中から生れてきたのであります。(25～26頁)

ここで亀井は、東洋内部に日本／＼中華民国という国家を見据え、日中戦争を「東洋の一大悲劇」と捉えながら、それゆゑ西洋精神に対峙する全東洋民族の一体感が生まれたのだという解釈を施している。弁証法よろしく、東洋内の「悲劇」を一段高次の西洋との「対決」へと抽象－昇華する亀井は、大東亜戦争開戦以後において日中戦争を正当化しつつ「東洋人の救ひ」だと意味づけている。

周化人(華中)は「われ／＼は東亜精神を強化するには、まづ東亜の精神をもつて積極的に発展しなければならぬと同時に、西洋の功利的思想を排斥、清算しなければならない」と述べて、やはり「われ／＼」という一人称複数代名詞を用いて東亜の一体感を強調しながら西洋を対置し、さらに「欧米の功利思想は、たゞ物質を重視し、精神の方面をば軽視してゐるがゆゑに「いろいろの階級闘争、民族間の戦争を惹き起す」(29～30頁)のだと、戦争の原因を欧米にみていく。同様に「今まで大東亜精神が西洋唯物的精神によつて曇らされてゐた」と精神面において大東亜／西洋を対置する愈鎮午(日本・朝鮮)も、「今やわれ／＼はその曇らされてゐた大東亜精神の曇りを拭ひ去らなければならない段階に立ち至つてゐる」(33頁)と西洋批判を展開している。「大東亜精神樹立につきましては、わが東洋婦人の道徳をもつてその根本にしなければならない」という呉瑛(満洲)が「貞節と孝行との二つは、西洋文明に絶対のないもの」(34頁)とするのも、大東亜－東洋／西洋を対置した上での西洋批判である。

以上にみられる、地域共同性に即して一人称複数代名詞「われわれ」を用い、「東／西」を対置－分節－序列化していく支配的な言説が、乱暴に展開されると次の舟橋聖一の発言へと変奏される。

私は昔から日本文学を学んでゐまして、私の創作の如きも微力ながらこの伝統を継承したいと念願してゐるのですが、私の勉強した時代は何と言つても米英依存の風潮が強く朝野を支配してゐて、どうしてもわれわれの態度は西洋文学を第一流とし、東洋の文学を第二流とする低い野心の下に終始してゐたのではないかと思ふのです。〔略〕これからは、今までのやうに、例へば万葉よりもジイド、源氏物語よりもマルロオを高く評価した誤りに陥ることなく、我国の文学は世界第一流の文学であるといふ自信をもたなければならない。(45頁)

米英／日本、西洋(文学)／東洋(文学)、『万葉集』／アンドレ・ジイド(仏)、『源氏物語』／アンドレ・マルロオ(仏)と二項対立を重ねながら、中国・満洲という国名や日中戦争にもふれていく舟橋は、一人称複数代名詞ではなく固有名を多用しながら、「日本文学」を「世界第一流の文学」へと性急におしあげていく。文学に視野を絞つた議論の中から、フランスの近代文学に日本の古典文学を対置していくこうした舟橋の議論も、「東／西」対比からの“東”復興言説の1つである。

### 3-3：構成員の一体化と日本文化

ここまでの検討に明らかなように 地域を示す言表－修辭に少なからぬゆれがみられた大東亜文学者大会ではあったが、“東／西”の対置が反復されていく以上、“東”を遂行的に一体化していく言表は支配的な言説を形成していく。もとより、一体化された“東”内部にも序列は入りこんでいく。

蒙古代表・恭佈札布は「今や日支事変並に大東亜戦の展開とともに、逞しく力強い日本文化の流れは、わが蒙疆にまで奔流し、種播かれ、これを培ひ模範としてゐる」ことを、「大東亜精神文化の興隆」(9頁)と言祝いでいる。ここでは、「日本文化の流れ」が満洲まで波及していることを大東亜という地域に位置づけながら、同時に日中戦争も肯定されており、日本の優位は明らかである。斎藤瀏は「日本、中華民国、満洲国、他の各国は一元を基として一体に溶け込むことこそわれ／＼の念願」(18頁)だと各国を並置して一人称複数代名詞を用いるものの、順序は問わず語りに序列を示しているし、「われ／＼」

が日本語であることも動かない。となると、ここで作動しているのは（大）東亜の構成員による一体化を、日本を中心とした序列のもとに進めたいという<sup>ダブル・スタンダード</sup>二重基準である。それは、“東／西”双方に関わる日本近代の特性によって説明－正当化される。「欧米の近代精神が勃興するやうになつて、その結果欧米の攻勢の下に、わが東洋は本当の精神をだん／＼と失ふやうになつて来た」と欧米／東洋を対置しつつ現状認識を示す藤田徳太郎は、「たゞその間東洋の一方にありまして、真に国家的な団結、民族的な統一を保ち、悠久の生命をもつて今日に至つて居」るのが日本だと指摘し、次のようにつづける。

然しながら東洋は満洲と云ひ、中華民国と云ひ、それ／＼に共通の一つの精神があります。それは「道」といふ考へ方であります。中華において王道といひ、満洲の建国におきましてもやはり王道楽土といふことが云はれ、わが日本において皇道と申しますのも、この「道」といふ精神において、やはり一脈の共通したものがあつて居ります。（30頁）

つまり、ひとたび日本の優位を確保した上で、「道」という精神を通じて、東洋という地域に共通点が見出されていくのだ。無署名「社説 大東亜文学者大会」（『朝日新聞』1942. 11. 3）には「大東亜戦争においてこれまで東亜諸民族を搾取し迫害し来つた米英諸勢力を打破するとともに東亜諸民族を糾合して政治的にも、経済的にも、文化的にも強固な団結の建設されることが期待されてゐる」（2面）といった一文が読まれ、米英／東亜を対置した上で、東亜諸民族の「糾合」「団結」が強調されている。ただし、「大東亜といへば何も今更私達の眼前に開けたのではないが、しかしこの戦争で私達は新に大東亜を発見したと言つてもよいから」だという「大会への希望」（『朝日新聞』1942. 11. 3）の島崎藤村が、何気なく「明治天皇を偲び奉るに余りある佳節に当り、わが／＼海を越えて来られた中国、満、蒙の代表諸君を迎へこの大会の序幕を開くことは何としても感を深くするものがある」（4面）と言表した通り、大東亜文学者大会に集つた構成員は、大東亜共栄圏が日本の天皇をその頂点に奉る象徴空間であることをも承認することになる。

そうであればなおのこと、（大）東亜における日本の文化の特質についても“東／西”を鍵語とした論及が重ねられていく。「東亜の仁義の思想は亡びたか」と問う香山光郎（日本・朝鮮）は、「この思想は、西洋思想の風塵にも拘らず、ちゃんと保存され、実行せられてゐ」たとして、「それは日本」（21頁）においてだという。また、バイコフ（満洲）も「日本民族は歐洲の文化を従来撰取し、その広大な生産工業を樹立し、かつ進歩して已まない経済力を發展させながらも、なほよく自己の特性を生かして古き美風を尊重し、武士道とか、或ひは八紘一字と云つたやうな非常に高遠な精神を基礎とする独自の民族文化を未だに持ち続けて来てゐます」（22頁）と述べて、西洋－欧州から学ぶべきものを適切に「撰取」しつつも、東亜－日本の思想－文化を保持しつづけることに成功した事例とされていく。

してみれば、大東亜戦争期－大東亜共栄圏における帝国日本とは、近代以後の“西”の影響下にあつて、適度な近代化を果たしつつも、独自の文化を損なうことのなかつた“東”におけるロールモデルとして、改めて価値づけられていくのだ。だからこそ、龍瑛宗（日本・台湾）が「大東亜精神とは申すまでもなくわが日本を中心とする大東亜の同胞が、共に楽しみ共に喜ぶ精神」（24頁）だと述べるのであり、ここに優位な日本を中心として（大）東亜の一体化が遂行的に果たされていく。

### 3-4：肯定される満洲事変・日中戦争

米英を対置して（大）東亜の一体化を押し進めていく日本にとって、躰きの石は満洲事変と日中戦争である。第一回大東亜文学者大会においては、この点について迂回することなく、むしろ積極的な論及がみられた。「大東亜文化共栄圏建設の基本観念は、東亜諸民族のアジア人としての性格の中に、真の東亜文化を建設することにある」とする無署名「社説 大東亜文学者大会」（前掲）では、「この観念は、吾人がすでに十一年前の満洲事変以来抱いてゐるものであり、支那事変によつていよいよその信念を固くしたところ」（2面）だとして、現在から過去遡及的に、満洲事変－支那事変－大東亜戦争という軌跡を、「真の東亜文化」の「建設」に向けての発展的展開へと物語化していく。

武者小路実篤は「正直に申して、支那事変が起きた時は、まだ判つきりした考へは浮かびませんでしたが、去年大東亜戦争が始まり、始めて支那事変の意義が判る気もしましたし、又私達の使命といふか、

進むべき方向もはつきり分つたやうに思ひます」として、次のように述べていく。

私の一番考へますのは、非常に分り切つたことですが、今まで米英にしましても、日本人や東洋の人達が濠洲などに入るのを禁じて置き乍ら、自分達は平気でアジアの中へ入り込んで来ました。それもわれ／＼を尊敬して入つて来たのではなく、われ／＼を征服し、監督しようとして入つて来たのは、間違ひでありました。彼等にしても、又良心ある人々は、自分達の態度は非常に虫がいい、勝手であると、自覚してゐる筈だと思ひます。ですからこの点を私達が主張すれば、全世界の人が認めねばならぬ問題で、決して難かしい理屈は要らないと思ひます。(16頁)

武者小路も大東亜戦争を契機として「支那事變の意義」を理解したといい、米英の「間違ひ」は明らかだともいう。その際、アジアにおける帝国日本の振る舞いについては、省みる素振りもない。これは武者小路の作家性であると同時に、大東亜戦争以後における日本(人)が産出する言説の文法である。

満洲国については、古丁(満洲)が「民族協和といふ精神は実に満洲建国と同時に生れた精神で、これはやがて大東亜共栄圏内に発揚せられ、それが大東亜文学の建設の根本になりはしないかと信ずる次第」(18頁)だと述べている。また、「われ／＼は英米を撃退して行くべく、昨年十二月八日決然と起ち上つたのでありますが、実をいへばわれ／＼は、既に十余年の前からその緒戦を開始した」のだと振り返る爵青(満洲)も、「大東亜共栄圏の建設の序幕ともいふべき、わが満洲国の建国」を「米英を向ふに廻して、最初に東洋人の手で東洋文化の世界を作つた一つの礎」だと位置づけ、「その形の違つた戦争を開始して以来十年の歳月を経過して、はじめて本格的な戦争即ち武力による今度の大東亜戦争が現はれて来た」(27～28頁)と述べて、大東亜戦争の世界史的意義から、満洲国建国(満洲事變)を、対米英戦の「緒戦」と過去遡及的に意味づけていく。日本人の立場からも、大東亜戦争を「日本国民が勇躍して迎へた戦争であり、勇躍して行ひつゝある戦争」だという加藤武雄が「これと対照して思ひ出されるのは、五六年前に支那事變の勃発した時のこと」だとして、当時を次のように振り返っている。

その時には何とも言へない気分が全日本を支配してゐたのです。正直のところ支那とは戦ひ度くなかつた。同文同種の国、歴史的、経済的、文化的のいづれの方面から見ても、畢竟運命を一にすべき国、この日支両国の相戦ふことは所謂兄弟牆に闘ぐことであつて、支那事變はまことにアジアの悲劇であると私共は考へてをります。

一体化すべき両国の争いを、亀井同様「アジアの悲劇」と捉える加藤は、しかし「その原因」を「主なるものは蒋介石政権の採つた抗日、反日の政策」だと指摘し、「一時的な時の勢ひに支配されて、東洋の運命を達観することを忘れた蒋介石政権の短見、謬見に帰すること」(40頁)だと犯人を名指しして日本の責任を回避しつつ、より高次-広域の大東亜戦争によって不問に付していく。

同様の論理は、「曾つての支那事變が大東亜戦争に発展した今日になつて、この歴史的過程からわれわれが米英の東亜侵略に対して目覚め、断乎としてこれを反撃する時期を得たことは、われわれの最も仕合はせとするところ」だという丁雨林(華中)にも共有されており、次の発言がつづく。

支那事變の勃発は、なるほど中国の間違ひです、当時の誤解によつて、日本に対する理解を失つたことは、まつたく日本に対して申訳ない次第です。しかし、この既に過去つた過誤は兎も角として、われわれは今次の大東亜戦争には挙つて、見識と理解と信頼を以て、日本と共に進むことを私は誓ひたいと思ふのであります。(拍手)曾つての中国は、日本は侵略者であると米英から逆宣伝されてゐましたが、今日に於ては、日本が中国の甦生に絶えず反省の忠言を下され、背後にある米英帝國主義者の間断飽くなき中国侵略を除去してくれた行為に対し、また両国間の今日の事態を保衛して下すつたことに対し、厚く謝意を表する次第です。(拍手)(43頁)

この発言をうけて、木村毅は「さつき丁雨林さんは、今度の支那事變が勃つたことは一つの誤りであると言はれましたが、この誤りがあつたればこそ、百年もかかつた英米勢力を挫いたのですから、その誤りをわれわれは寧ろ欣びたい」(44頁)と、米英と対置しながら日本の軍事行動を正当化する丁の発言を、最大限評価していく。また、加藤武雄も「真情の吐露」(『日本学藝新聞』1942.11.15)で先の丁発言にふれ、「此の丁君の言葉は尤も強く僕の心を打つた」として、次のやうにつづける。

この事を支那通の某氏に語ると、今度の文学者会議はその言葉をきゝ得ただけでも慥かに大成功だ



といはれた。中国人は、よしどんな親日家であるにしても、決して、そんなことは云はぬものだ。これまで十五度も二十度も中国人と語り合ったが、曾てさうした率直な表白をき、得た事はないと某氏は云ふのである。(1面)

こうしたことから「真情を吐露し合へるのは矢張り文学者だ」と加藤が述べるように、言表-修辞によって大東亜戦争とあわせて、そのことによって満州事変-日中戦争をも正当化していくところに、思想戦を担う文学者による、大東亜文学者大会における言説生産の歴史的-社会的意義がある。

### 3-5: 会議用語としての日本語

すでに「日本の委員は三十名 大東亜文学者大会の細目決る」(『朝日新聞』1942.10.29)という記事において、「会議用語は日本語で、他国語は日本語への翻訳が附くが、日本語には一切翻訳がつかない」(3面)と報じられていたが、実際に第一回大東亜文学者大会ではそのような会議用語で開催された。

くわえて、日本語についての発言もあいついだ。愈鎮午(日本・朝鮮)は「米英の植民地に対する愚民政策などを撃滅しまして、東亜十億の民衆に文化を徹底させるとともに、更に根本的には八紘一宇の日本の肇国精神を十億の民衆に徹底させる、そのために日本語の普及といふことが非常に必要」(33頁)だと発言した。日本語の普及を論じる際にも、米英/東亜が対置され、しかも日本精神普及のための媒介としても日本語の意義が位置づけられている。同様に西川満(日本・台湾)も、「この大東亜の精神を会得するにはどうしてもわが日本語の理解が必要」だと述べ、「日本語を知ることによつて、はじめて大東亜の指導原理と云ふべき八紘一宇の大精神にふれることが出来る」として、次のようにつづける。

私は昨日朝鮮の香川光郎氏のお話を非常な感動を以て聞いた一人であります、香川氏のあの烈々たる信念も亦、氏が国語を理解されたからこそ、あの境地に達せられたのだと感ぜずにはゐられなかつたのであります。同じく朝鮮の愈鎮午氏も朝鮮に於ける国語の普及について語られました、わが台湾の国語普及率も近年実にめざましきものがあるのであります。〔略〕国語の普及するところ必ずそれに比例して大東亜戦争の目的完遂への国民としての自覚が高まつたのであります。(46頁)

日本の文学者の発言としては、吉屋信子が「きつと満洲や中華民国その他の国の々が、日本語がまだ普及されず、却つて外国の言葉の方を御存知のために、英米の人々の日本に対する考へ方や見方を通じて、日本の概念を得られた機会があつたかも知れません」と、やはり「外国の言葉」(英語)を牽制しながら、「これからはさういふことでなしに、直接にお互の国の大衆に、お互の国の作家の作品が普及するといふ風にしたい」(34頁)と述べている。同様の発言は、村岡花子「私の念願 大東亜文学者大会に寄す」(『日本学藝新聞』1942.11.1)にもみられ、「我々は長い間米英語に依つて描き出されたお互の姿を見ることに馴れて来た」と反省する村岡は、「日滿華の文学者たちは、銘々の国の所有してゐる最上最高の思想を相互に理解し合ひ、それに依つて我々の目標とするところの大東亜新秩序の建設を成果あらしめたいと私は切に念願する」という。さらに村岡は、「米英人の中にはさまずして、東亜の民族が直接に語り共に読み、共に書くことこそ大東亜を結ぶ道であると私は信じ、知り合ふことの少なかつた現在までの歳月を惜み、将来の親睦に大きな希望をかけてゐる」(4面)と発言している。両者とも、無意識のうちに(大)東亜の共通語として日本語のみを想定していることは疑えない。

これが、日本を中心として(大)東亜の一体化を掲げるという二重基準<sup>ダブル・スタンダード</sup>のあらわれであることはみやすいが、異論がなかつたわけではない。一戸務は「大東亜文化の建設 大東亜文学者会議の成果」(『支那語雑誌』1942.12)で「わたくし個人として、少しく遺憾と思つた感想」を次のようにもらしている。

日本文学者のうちに、ひとりとして支那語を用ひるものがなく、会議後の満蒙華文人と支那語を以て談笑してゐる日本の作家のひとりも見受けなかつたことは、特にわたくしのごとく支那学を専攻し、今回の文学者会議の委員として臨席したのものには、日本の支那語教育の発達しおらぬのを遺憾に感じ、その不徹底を思つて一抹の淋しさを禁じあたはぬものがあつた。(7頁)

大東亜共栄圏という理念に即した(大)東亜の一体化には、しかしさまざまな局面で二重基準が作動しており、それは地域内の使用言語においても同様であつた。総じて、第一回大東亜文学者大会におい

て産出された言説は、しかしそれを構成する個々の言表－修辞には亀裂も少なからず孕まれていたのだ。

#### 4. 支配的な言説内部の亀裂

第一回大東亜文学者大会では、日本に限らず（大）東亜から参加した文学者も含め、大東亜戦争－大東亜共栄圏のイデオロギーを肯定－顕揚する言説が産出された。と同時に、本稿で多角的に検証してきた通り、日本の文学者による言説にも少なからぬ亀裂が走っていた。武者小路実篤に、次の発言がある。

われ／＼文士は、実行力が割にありませんが、しかし真理には忠実なのですから、私達が本当に人間はかう生きるのがいいし、アジアの人達は協力して進むのが本当であるとはつきり自覚し、実行出来ましたら、われ／＼の信頼出来る実行力のある人達も、快くわれ／＼の考へを受け容れて、われわれの理想を実現して呉れると思ひます。(16頁)

大東亜戦争－大東亜共栄圏のイデオロギーに抵触するところはないにもかかわらず、具体的な現実ではなく「人間」「真理」を根拠とした主張となっており、支配的な言説を脱臼させる言表－修辞だといえる。あるいは、長與善郎は、英米を対置した大東亜共栄圏建設の困難を次のように語っている。

単に英米思想の自由主義とか個人主義を排撃するといふだけでは極く簡単であります、事実上建設して行く、開発して行くといふやうなためには、いろ／＼学ぶべき芸術、科学——さういふ風なもの、現在非常に緊急に必要なのでありますから、たゞ英米だといふやうなことに囚はれてゐるといふことは非常にけち臭いことで、八紘一字の大きな広やかな御精神といふものは、もつと全世界を宇と為す抱擁力の大きいものであると思ひます。(27頁)

国より大きなスケールで考えるという発想はこの時期に支配的な言説と共振しているものの、その際の拠り所が（大）東亜をつきぬけて「全世界」とされており、武者小路実篤の言表－修辞に近い。銭稲孫・張我軍・古丁・長與善郎・片岡鐵兵・一戸務「大東亜作家文学談（座談会）」（『新潮』1942.12）においても長與は、次のようにして（大）東亜一体化の困難を独自の観点から語っていた。

それ〔支那・朝鮮・日本の文化〕を今日融合して、大東亜が一身同体にならなければならぬといふ政治的要請の為に文学者の心持ちを、無理に一致させるといふのは本當ぢやない、やつぱり中国の人は中国の本質をありのまま発展させて行つて、印度は印度として、日本は日本としてありのままの伝来の美質を磨いて、さうして互に尊敬することによつてその結果益々融合して行くといふことでなければ面白くない。(41頁)

ここで長與は、大東亜地域を分割して各国独自の「美質」を尊重している。しかも、そのための根拠としては「面白くない」という文学者らしい曖昧な、しかし断固たる趣味判断が提示されている。

もとより、大東亜戦争－大東亜共栄圏のイデオロギーに対して、あからさまな異論が言表できるわけもない。また、こうした亀裂をもって何かしらの抵抗と捉えたいわけでもないし、日本内外の参加者による歴史的な発話を裁断あるいは擁護したいわけでもない。それでも、これらの言表－修辞が、大東亜文学者大会をおおっていた大東亜戦争－大東亜共栄圏を肯定していく支配的な言説に亀裂を走らせるノイズであることは疑いなく、こうした局面に小文字の歴史の痕跡が見出せるはずである。

総じて、第一回大東亜文学者大会をめぐる言説が、大東亜戦争－大東亜共栄圏を肯定しつつ、大東亜を率いて西洋（米英）に対峙する日本の世界史的使命を積極的に賛美していったことは明らかである。ただし、それと同時に、個々の言表－修辞の分析からは、それらの支配的な言説に少なからぬ亀裂が走っていたことも明らかにできた。その後、大東亜戦争の戦局は悪化の一途をたどっていくが、それでも、第二回、第三回と大東亜文学者大会はつづけられていく。これらの言説分析が、次の課題である。

(まつもと かつや 所員、神奈川大学外国語学部教授)